禪海一瀾　夕死第十則

後藤　瑞巖

孔子曰。朝聞道夕死可矣。

此の「夕死」の一則は、論語の里仁篇に出てゐる一段で能く世人に膾炙されて居る語であるが、實際と云ふ事になると仲々容易ならぬ一句である。

「朝聞道夕死可矣。」朝に道を聞いて夕に死すとも斷じて苦るしくない。一體人世に於て逆順の內逆の最も大なるは死であるが、其の逆境の最大關に逢着するも可なりと斷言できる道とは如何なる道を指すか。然して此處に重大な事は聞くと云ふ點にある。如何なる道を如何に聞く事に依つて夕に死すとも可なるか。昔から道については古人も種々と扱つて來て居られるが、端的に云ふならば天下の大道宇宙の無上大法を指して道と云ふ。後に出て來るが中庸に天命之謂性、率性之謂道と分明に示されて居る。卽ち性を知る事に依つて道を聞く事が出來るのである。然らば此の性とはと云ふと字の通り生れ乍らの心卽ち生地のまゝの心である、垢づかぬ心である、卽ち自他の對立を止揚した絕對の所である、六祖大師は、父母未生以前と云ふて御座る。自他の對立を超越して父母未生

以前の消息を知らんと要せば、是非座布團上に於て放身捨命大死一番の重關を透過しなければならぬ。是が行けてこそ始めて夕に死すとも可なりと云ふ語が拜めると云へ樣か。若し如何に巧妙に言辭を連ね說き得ても眞劍首がかかつて居らぬ內は要するに畵餅にすぎぬ、飢を充たすことは出來ぬ。

今日白隱和尙化を他界に遷されてより將に二百年に垂々として居る。白隱和尙が刻苦漸く日本の禪を中興されシステムを立てゝ置かれたが次第に形式化して、今や眞の面目を失はんとする傾向がある。實に嘆かはしい事だ。世間で善知識だとか名僧だとか云はれる程の人が、名利の爲に奴隷となつて外界からの誘惑に引き廻されたり世間の噂に上る人が往々ある。かうした人達は眞實に放身捨命大死一番が出來て居るであらうかを疑はざるを得ん。諸士は近々例年の學校の接心を行ヤらなければならないが、此の機會に座布團上に於て死に切る處まで足の一本や二本ヘシ折る位の勢で行つてもらひたい。本當に命が打ち込まれた修業でなくてはいざと云ふ時に何んの役にも立たない。

横須賀の附近に住んで居る知人の話しによると、飛行機の操縱士志願者は次男以下でなければ採用しないそうだ。そして是を敎育する標語が「死んで吳れ」と云ふ語だそうな。それはどう云ふ所以かと云ふと、母艦から飛び出した場合霧が深かつたり雪に遮ぎられたりして方向が分らなくなる、其の時は無電で母艦と連絡する事が出來る樣になつては居るが、同時に敵に母艦の位置を知られて襲擊される虞がある、だから、先づ第一に死ぬと云ふ事を敎へるのだそうだが實に悲壯な話で

ある。外國から日本が恐がられるのはかうした點があるからである。又日本の軍隊の強いのはかやうに命を賭して居る點にあるのである。

近頃の若い雲水達が體驗が得られないと云ふ樣な事を云ふのをよく聞くが、此は實際に自分を放り出さない證據である。合理合法總べてを理論で片づけて實際に放身捨命底の努力をしないでゐて、却てどうも師とするに足る和尚が居ないなんて生意氣な事を云ふ、以ての外の事である。臨濟大師は儞が信不及の故にと云はれて居る。自分自身に信念が無いからである。ひとかど信念の有りそうな顏をして居るが、一つ突込で見ると直ぐに顏色が變つてしまふ。昔から大政治家、或は大忠臣と云はれる人達、楠公にしても近くは大西鄕なぞにしても國家の柱石と云はれる程の人は皆地位も名譽も生命も放り出してかゝつて居る。だから大きな仕事が出來て居る。今日政治家と云はれる人達の中に眞に自己を投げ出して居る人が能く幾人居るであらうか。若し居るならば此の非常時を越える事も別に難事では無いのである。眞乎道を聞かんと要せば百尺竿頭一歩を進め絶後に忽然として現前する力を把握せねばならぬ。誠に放身捨命は無我の源泉であり力の根源である。自己を投げ出して宇宙と一元化する、卽ち、宇宙と自己と一體、萬物同根の境へ超入する。是は論理的に飛躍せねば手に入らぬ端的であり宗教體驗の眞面目である。

夫から洪川和尚の評唱であるが、此の語は卽ち夕死の一句は孔門に於ける最難關であつて四書六

經中の眼目である、此の境地を經ずしては四書六經も單なる文字に過ぎぬので、此處に眼をつけられた洪川和尚はさすがに作家である。

宋の張商英天覺卽ち彼の有名な無盡居士が「護法論」の冒頭此語を引いて、道と云へば仁義忠信の事であらうと考へるであらうが、無論孔子は仁義忠信の道を常に說いて御座る。今改めて之を唱へ出す必要はない。然らば道敎で云ふ處の長生久視を以て道と爲すか。此は不老長生の事であるがそんな仙術の樣な物じやない。それでは夕死可矣と少々合はない。「豈非大覺慈尊識心見性無上菩提之道也云々」と云ふて居る。心を靜め自己を掘り下げてこそ識心卽ち煩惱心を脫却し大死一番の時見性成佛の端的が現ずるのである。識心が拂ひ盡された所此が「無上菩提」卽ち此の上なき所の覺めである。此が道である。之を手に入れゝば生死の對立は解消して地獄に入るも尙花觀に遊ぶが如しと云ふ妙處が我がものになる。

予天覺の人となりを視るに實に聰明俊潑儒佛道の三敎を究め實に其學名一世に鳴り渡つて居る。此の無盡居士が護法論を著すに到つたに付いて面白い話がある。未だ彼が地方の一長官時代、地方の巡視をして居ると或る寺院に大藏經が整然と陳列してあるのを見て大いに憤慨して、佛敎は抑々夷狄の敎である、かゝる敎が儒敎を以て生命とする中國に行はれて居る事は、非常に憂ふべき事である、無佛論を書いて大いに佛敎を排擊しようと考へた。家に歸つて家人を遠ざけて構想を練つて

見るが仲々いゝ考へが浮ばぬ。夜も三更を過ぎんとするに机に向つて居るのを夫人向氏と云ふが見て、其の譯を聞いた。天覺は今日の一分始終を話して私しは今無佛論を書いて一つ佛敎を大いに排擊しようと思ふて思想を練つて居る處だ、と云ふと夫人は、無佛論と云ふて已に御自身で否定して居られるではありませんか、其れ以上別に書く事はありますまい、書物をお書きになるなら有佛論より致し方ありますまい、然し書物をお作りになるのを御止めは致しませんが、佛書を御讀みに成た事がありますかと云ふと、悲しい事に天覺一度も佛敎の書物を讀んだ事が無かつたので、實は一つも讀まぬと云ふと、夫人は最も簡單なので般若心經と云ふ御經があります、それでも御讀みになつては如何ですか、と云はれて天覺心中になるほどと思ひ、翌日早速心經を讀んで見て驚いた。彼が考へて居た樣な地獄だとか極樂だとか云ふ樣な事は一つも書いてない。僅か二百七十四文字ではあるが、般若の微妙な空の思想が說かれてゐることが朧げながら判つた。又或る日友人を訪ねた時其の書齋に維摩經の置かれてあるのを見て繙いて見ると、是亦前と同樣仲々天道とか地獄とか云ふ樣な事は一つも書かれて居らぬ。經中の「此病非大地亦不離大地」の處に到つて大いに悟る處あり、兜率の悅禪師に參じて刻苦大いに心を用ひ後に無盡居士として白衣の大宗匠となつた人である。

又周惇頤卽ち周茂叔は道統の上では朱子の祖父に當る人であるが、黃龍の慧南禪師に謁した時禪師から「夕死可矣」の聖語をひいて、畢竟何を以て夕に死すとも可なる乎、と突きつけられ周惇頤

答へる事が出來なかつた。此の答へられなかつた所が却て惇頤の偉い處で、彼程の學者が何んとか云へぬ事も無いであらうが、此處が眞正の學者と僞せ學者の違ふ所である。後に金山の佛印禪師に參じ畢竟何を以て夕に死すとも可なるやと參問した。佛印禪師は「滿目の青山見るに一任す」と答へられたが未だ判らなかつたので一寸擬議した。すると佛印禪師腹の底へ響き渡る樣な聲で呵々大笑をやられた。其の作略に會ふて大いに省ありとある。「看哉吾門之大事其難如〻是。只是以〻放身捨命之時節〻爲則。」此が大切である。周惇頤が平凡な學者であるならば容易の心を挾んで一言一句に答へ去つたであらう。然し答へ得ても眞の死すとも可なる大安心は得られなかつたであらう。此の故に、大道を學ばんとする者は、如何なる道を聞いたらよいか。命と引き替へをするに足る道は如何なる道か。「厓來厓去。至〻無〻可〻厓處〻謂〻之放身捨命大死一番底時節〻。」開山大師の遺誡に「路頭再過」の語がある。今更に輕々に拜讀出來ぬと思ふ。禪宗の生命は慨念の遊戯や觀念の配列じやない。概念遊戯で事足りるなら學問で結構。學校は何も授業を休んでまで接心は行らない。又禪堂に入つて十年二十年の苦心は不要である。大疑の下に大悟ありと昔から云ふて居る。大いに疑つて眞黑々と云ふ處まで行くがよい。疑團と云ふのは其の事である。前後を際斷し情盡き感忘する處、恰も一箇の髑髏の如きものだ。此の時更に大勇猛心を振ひ立てウンと力を入れて向前する時、脚下大光明の世界が現れる。皆は髑髏は髑髏だがとても再生覺束かない有樣だ。そんな事では此の眞の大道は手

に入らんて。「謂之絶後再蘇底時節」。」全く不思議な事である。是無くしていくら公案を數へて見ても、其れは公案技術屋であつて其んな者は眞の禪僧とは云へない。

一度此の大事が手に入れば、「孔子口頭之美味過於候鯖矣。」かうなくてはならん。候鯖とは故事があるが此處には略して置く、唯、非常に美味い御馳走の事である。白隱和尚は巖頭和尚萬福現在々々巖頭和尚萬福現在々々と云ふて躍り上つて喜んだとある。此の美味一度喰べたら萬刧千生飢へを知らぬ。「孔子口頭之美味過候鯖矣。」

附記。本篇は學長老大師の提唱速記に依つたものであります。從て文責はすべて本會委員にあります。